

B-18 洗濯機による綿布の損傷
(重量法によるについて)

福岡女家政 平松 園江
九州学園福岡女短大 ○森川 義子
松浦 正子

従来洗濯による布地の損傷は多く強度変化(強度法)によっていた。私共も前におむつ用のあらい織物の機械洗いによる損傷をみるのに適切な方法として重量による変化(重量法)をとり、これと強度法をあわせ報告してきた。今までは布を継続浸漬し長時間洗濯する方法によったので今回は1時間洗濯後脱水乾燥と、1時間洗濯後浸漬のままとの各々を繰り返して長時間洗った時の処理の違いによる影響を調べる目的で両方法により検討した。

洗濯機は損傷率の大きいF社二重噴流(強)と小さいN社反転(弱)を使用し、供試布は綿の平織とバーズアイ織で行ない洗剤は使わず、浴比1:30、液温 $28^{\circ}\text{C}\pm 3$ とし1時間機械を回転し、後30分休止した。休止間浸漬したものを継続洗濯、脱水乾燥したものを脱水洗濯とする。可動時間4時間毎に5回と23、25時間目に重量測定した。布乾燥と気湿による布重量への影響は調整布を別に用意し補正した。更に大試料より30本糸密度補正した小試料(35×5)の重量・強度を測定した。

洗濯機による綿布の損傷をみる場合、強度法は同一試料布の時間経過による変化は調べられない。重量法は大試料で相互重量の入れ合わせで同一重量に整えることができるので洗濯時間毎の重量条件が揃う長所がある。布別の損傷はバーズアイが強度重量とも大で前の報告と同じである。洗濯経過時間の要因は1%の危険率で有意で、洗濯処理間では脱水乾燥が損傷が大きい傾向はみられる。